

西新町遺跡

～古墳時代初頭、日本列島最大級の国際貿易港～



九州歴史資料館

にしんまち

さわら

しゅうゆうかん

西新町遺跡は、福岡市早良区西新の県立修猷館高等学校を中心に広がる、弥生時代中頃～古墳時代初頭、近世～近代の集落遺跡です。これまでの福岡県教育委員会及び福岡市教育委員会の発掘調査により、今から約1,700年前の古墳時代初頭、朝鮮半島をはじめ、東海、近畿、山陰、瀬戸内の人々が交易や最先端の情報・技術を手に入れるため西新の地に集まった、当時の日本列島最大級の国際交易の場であったことが明らかになりました。

西新町遺跡の5つの特徴

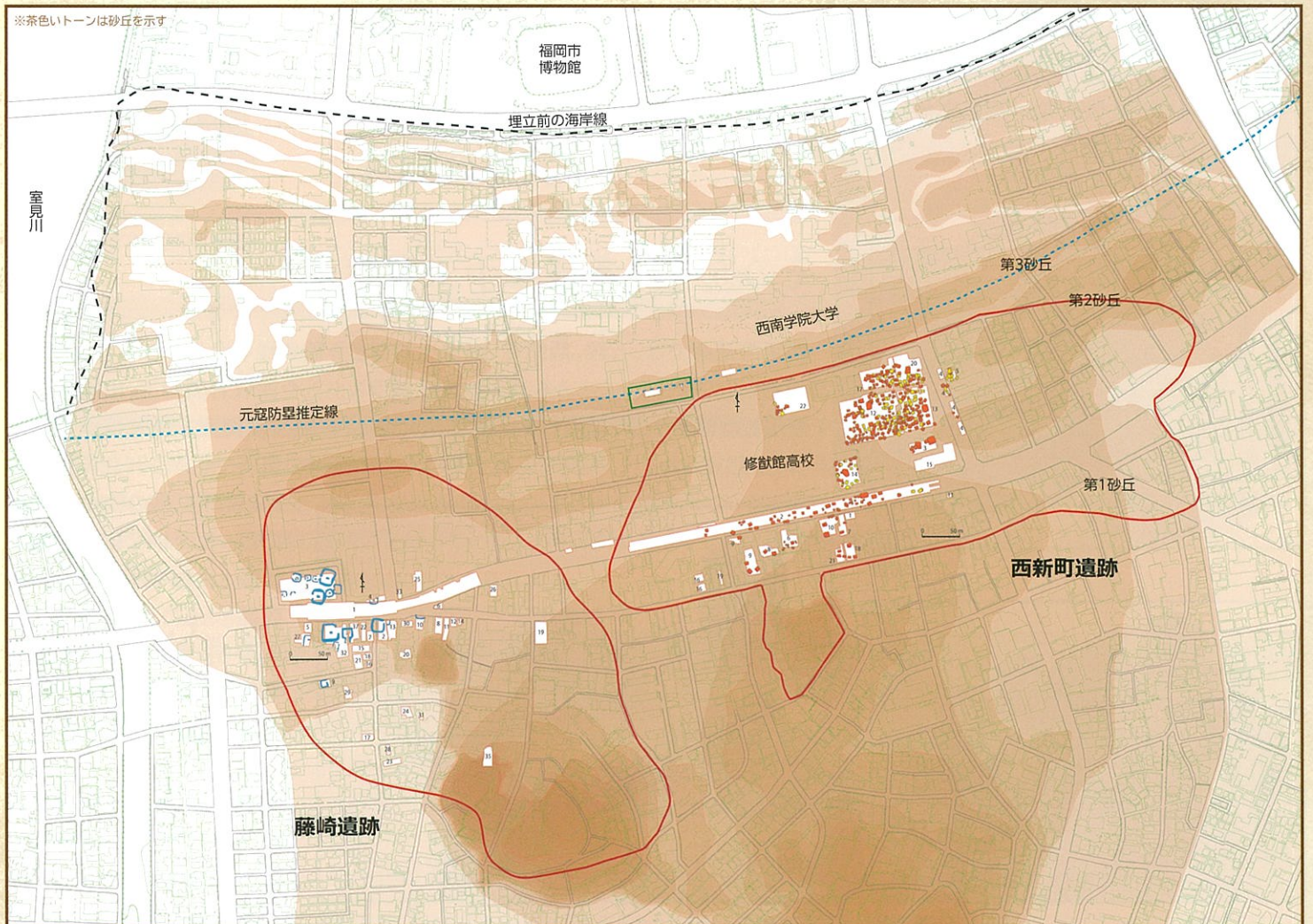
その① 海沿いの立地

～冬の北風はいやでした～

西新町遺跡は今から約2,500年前(弥生時代初頭頃)に形成された博多湾の海岸線に平行して東西に長く延びる砂丘上に立地しています。遺跡が最盛期を迎える今から1,700年前には、遺跡の少し北側まで海が広がっていました。今は高校内に位置しているのでわかりにくいかもしれませんが、海沿いなので、集落は強い波風の影響がある砂丘の海側斜面を避け、砂丘間の鞍部及び内陸側斜面に営まれています。



西新町遺跡遠景(南から)



西新町遺跡と藤崎遺跡の立地(福岡市博物館提供)

その② ポツンと遺跡

～まさに古墳時代の「出島」！～

西新町遺跡が最盛期を迎える古墳時代初頭、西新町集落の墓地と想定されている遺跡西側の藤崎遺跡^{ふじさき}以外、約2km四方には同時期の遺跡はほとんど確認されておらず、まさにポツンと立地した珍しい状態です。交易港として、物資の獲得という利点がある一方、戦いや伝染病等の社会情勢を混乱させる事象を防ぐため、わざと孤立状態になるように、政治の中心地から離れたところに置かれたという可能性もあります。まさに古墳時代の「出島」と言えます。



朝鮮半島系土器

その③ 対外交易の拠点

～こりゃコリアタウン？～

西新町遺跡では3世紀末～4世紀前半の日本列島で最も多くの朝鮮半島系土器が出土しました、というより、断トツに多い量が出土しました。考古学では、日常で使う土器の動きは人の動きと関係すると考えますので、古墳時代初頭、西新町遺跡の地には多くの朝鮮半島の人に来て、一時滞在していたと考えられます。また朝鮮半島から伝わった竪穴住居のカマドの存在から、それらの朝鮮半島系土器を生活の中で取り入れていたとみられます。ここは古墳時代の「コリアタウン」だったのかもしれませんが。



5次調査出土板状鉄斧
(福岡市埋蔵文化財センター蔵)

その④ 国内交易の拠点

～「加耶の鉄」が欲しかったのです～

当時の日本では鉄素材をつくる技術はなく、基本的に輸入品と考えられています。中国の歴史書『魏志』東夷伝の弁辰条には「(弁辰)國、鉄を出す。韓・濊・倭みなしたがってこれを取る。」とあり、倭人が朝鮮半島東南部にあった弁辰、のちの加耶の鉄を入手していたことがわかります。3世紀には、石器はほぼ石庖丁のみとなり、日常生活でも鉄が幅広く利用されます。前方後円墳などの大型古墳を造るための土木具にも鉄製農工具が使用されるようになるので、鉄は非常に重要な素材でした。鉄のみならず、最先端の技術や知識を朝鮮半島の人から直接入手するため、列島各地の人々が西新の地まで集まってきたことが、東海、近畿、山陰、瀬戸内等日本列島各地に由来する多くの遺物から予想できます。



石錘

その⑤ 多様な手工業生産

～商品ラインナップそろえました～

西新町遺跡では、石錘、飯蛸壺、製塩土器など多種多様な漁具の存在から様々な海産物を取り扱っていたとみられます。また、ガラス小玉や蛇紋岩製勾玉、山陰産碧玉^{へきぎよく}を使用した玉類生産、鞆羽口から鉄器製作など、各種生産拠点を併せ持つ集落であったと想定されます。西新町遺跡を含め博多湾沿岸の集落で生産された各種商品

は、対外交易の物々交換品であっただけではなく、鉄を代表とする対外交易で得た商品とともに、列島各地に流通させる際に、西新町遺跡の集団はその担い手であった可能性があります。



飯蛸壺



ガラス勾玉・小玉鋳型

朝鮮半島系土器は、基本的に朝鮮半島で製作されて、日本に持ち込まれた土器のことで、「系」とついているので、朝鮮半島の土器の製作技術で作られた日本の土器の要素が強い土器、日本の土器を作る工人在朝鮮半島の土器をまねて製作された土器など、朝鮮半島の影響を受けた日本出土の土器も含めて朝鮮半島系土器と呼んでいます。

朝鮮半島系土器は、土器の形や灰色・薄い灰色に硬く焼きしまったもの、土器の土(胎土)の特徴など、その当時の日本の土器とおおよその区別はしやすい方です。ただし、細かな区別は簡単ではなく、朝鮮半島で作られ、日本に持ち込まれた土器は土の混和材などによって、おおよそわかりますが、困難なのは、朝鮮半島の土器の製作技術で作られた日本の土器、ないしは日本の土器を作る工人在朝鮮半島の土器をまねて製作された土器です。この区別の基準については、今後も議論が必要でしょう。

西新町遺跡を解説する

西新町遺跡の範囲は東西430m、南北250mと想定されています。これまでの発掘調査で520棟を超える弥生時代後期終末～古墳時代前期前半を中心とする竪穴住居跡が確認されています。ここでは、西新町遺跡の調査成果について、紹介します。



カマド付竪穴住居跡(12次調査81号住居)

1 カマド付竪穴住居と炉付竪穴住居

～コメの食感、こだわりました～

西新町遺跡は砂丘上なので、住民は砂地に掘り込んだ^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居に住んでいました。竪穴住居の20%には主にコメを蒸すための調理設備であるカマドが設置されており、それ以外はコメ等を土器で炊く「炉」が設置されています。カマドは同時期の日本列島にはほとんどなく、朝鮮半島に多くみられるので、朝鮮半島の人々が西新町の地にやってくる、一定期間いた証拠となります。



石錘出土状況(17次調査7号住居)

2 石錘ハウス

～タイは昔からめでタイ魚～

17次調査7号住居では、石錘12点とほぼ自然石の石錘162点が、網に付いたまま丸めて捨てたような状態で発見されました。これらは民俗例などからタイを対象にした漁網一式である可能性があります。

3 玉ホーム

～足りない商品は、自ら作ります～

12次調査96号住居からは、蛇紋岩製勾玉の原石がまとまって出土しました。また遺跡からは蛇紋岩製勾玉の未完成品や玉を磨く際の砥石が発見されていますので、西新町遺跡では蛇紋岩製勾玉作りを行っていたとわかります。なお、玉類は朝鮮半島との主な交易品という意見がありますので、西新町遺跡では交易品として玉を生産していたとみられます。

4 大きな井戸

～水は命の次に大事です～

3ヶ所で長方形の井戸が確認されており、一つは上面が約24m×15mを測る巨大な井戸です。砂丘の立地なので頻繁に崩落があるからで、スロープ状の大型井戸を造ったと予測されます。水がないと暮らせませんので、井戸は大事です。



玉原石出土状況(12次調査96号住居)



玉原石と加工品

Column

藤崎遺跡 ヤマト王権も認めました

藤崎遺跡は西新町遺跡と同一の砂丘上に位置し、これまでに西新町遺跡の古墳時代集落とほぼ同時期の方形周溝墓群が確認されていることから、西新町遺跡の墓地の可能性が指摘されています。このうち、藤崎遺跡3次調査6号方形周溝墓では三角ぶちにしんにしやばきょう緑二神二車馬鏡1面が出土し、32次調査1号方形周溝墓からは三角縁複波文帯盤龍鏡1面が出土したとされます。これらの三角縁神獸鏡は、日本列島各地で古墳時代前期の中心的な古墳から出土し、近畿地方のヤマト王権が、各地の豪族の権威を認めた証として配布したものと考えられています。藤崎遺跡のような比較的小規模な古墳に、複数の三角縁神獸鏡などの大型鏡が副葬されることは珍しく、西新町遺跡の重要性を示しています。



藤崎遺跡出土三角縁二神二車馬鏡
(福岡市指定文化財、福岡市埋蔵文化財センター蔵)

おわりに

西新町遺跡は、朝鮮半島から西日本の広範囲で人々が往来し、交流する交易拠点であるとともに、海産物や玉類を生産する工房的な性格を有しており、一般的な集落との性格を異にする、様々な性格を併せ持った当該期の日本列島では類をみない一大交易拠点集落として位置づけられます。

ただし、交易品を保管するための倉庫群、棧橋などの港湾施設、道路など、港に必要な施設は未発見であり、今後の発掘調査の課題です。

再整理事業はじめました!!

整理整頓が第一

福岡県教育委員会では、令和4年度から令和6年度にかけて西新町遺跡出土品の再整理事業を実施します。県が刊行した発掘調査報告書9冊の内、図や写真が掲載されている5千点以上の遺物の中から、資料の残りが良く極めて重要な歴史的価値を有する資料と、報告書に掲載され歴史的価値はあるものの、破片や残りが悪い資料に分けます。西新町遺跡の出土品の多くは破片資料であっても研究資料として重要な価値を持った資料が数多くあり、選別には細心の注意が必要です。

仕分けたものは今後展示で活用しやすいようにきちんと収納していく作業を行っています。多量にある遺物だからこそ、きちんと整理整頓することは重要です。



12次調査21号住居出土土器

「西新町遺跡」～古墳時代初頭、日本列島最大級の国際貿易港～

発行：九州歴史資料館 発行日：令和5年3月31日
URL：<https://kyureki.jp> 印刷：株式会社 三光